# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 251

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

# 目次

5001.【日本滞在記】ゆとりある岐阜への好感

5002.【日本滞在記】岐阜で迎えた最初の朝に

5003.【日本滞在記】岐阜滞在初日に見た夢

5004.【日本滞在記】今朝方の夢の続き

5005.【日本滞在記】関市立篠田桃紅美術空間を訪れて

5006.【日本滞在記】家族で旅をしたあの日あの時

5007.【日本滞在記】確かな変貌:有矛盾かつ無矛盾なる人生

5008.【日本滞在記】加藤栄三・東一記念美術館へ:手紙

5009.【日本滞在記】加藤栄三・東一記念美術館を訪れて

5010.【日本滞在記】歌を歌うように、祈りを捧げるように作曲を

5011.【日本滞在記】魂の救済に向けて

5012.【日本滞在記】岐阜を出発する朝に

5013.【日本滞在記】10年越しの何かに期待して:今朝方の夢

5014.【日本滞在記】大坂滞在二日目の朝に

5015.【日本滞在記】楽しみと喜びで満ち満ちた大海の中で

5016.【日本滞在記】10年の時を経て:導きに導かれた人生

5017.【日本滞在記】風、そして輝き

5018.【日本滞在記】心と魂まで降りていく問い

5019.【日本滞在記】嬉しい贈り物

5020.【日本滞在記】実家での贅沢なひと時を味わいながら

© YOHEI KATO 2019

## 5001.【日本滞在記】ゆとりある岐阜への好感

時刻は午後の6時半を迎えた。午後の3時過ぎに岐阜に到着し、つい先ほど夕食を摂り終えて、今はホテルの自室でくつろいでいる。

岐阜駅に到着してすぐに感じたが、岐阜駅も群馬の高崎駅と同様に、東京駅に比べて圧倒的に人が少なく、密集した人間が生み出す嫌なエネルギーがない。

岐阜駅を抜けると、幾分生暖かい風が頬を伝った。ホテルは駅から歩いてすぐのところにし、駅からのアクセス及びサービスも充実しており、とても快適なホテルで満足している。

ホテルのチェックインを済ませ、ひと休憩した後に、岐阜駅の中にある成城石井というスーパーでオーガニック食材を購入した。岐阜に来る前に事前にオーガニックスーパーについて調べており、その他にも何件かスーパーを見つけていたのだが、駅構内のこのスーパーで必要な食材を全て購入することができてとても満足している。具体的には、オーガニックの納豆（以下、「オーガニック」を省略）、玄米味噌、5種類のキノコのサラダ、茹でたサツマイモ、イワシの胡麻和え（私は完全なベジタリアンではなく、ごくたまに魚は食べる。とはいえ、魚を食べるのは半年ぶりだ）、3種類のナッツを購入した。ナッツは、明日美術館に行く際の軽食として持って行こうと思う。

今日は早朝の4時に起床し、午前中は銀座のItoyaとApple Storeに寄ったりと散歩をし、さらには重い荷物を引き下げて駅まで歩いて行ったため、岐阜に向かう前に、東京駅で昼食を購入していた。昼食を食べるのは半年振りだということは一つ前の日記に書いたとおりである。

昨日のボルダリングで全身の筋力を使ったのに引き続き、幾つか手荷物で重たいものを持って筋力を使ったので、筋力の回復と発達のためにプロテイン含有量が多そうなうなぎと明太子の弁当を駅構内で購入した。最後にうなぎと明太子を食べたのはいつか覚えていないぐらいであり、白米も久しぶりに食べた。欲を言えばこれが玄米であれば理想だったのだが、そう贅沢も言っていられなかった。新幹線の待合室でこの弁当を食べた時、その懐かしい味に心底感激した。そのようなことを思い出しながら、ホテルの自室から岐阜の夜景を眺めている。

© YOHEI KATO 2019

こうした地方都市の落ち着きを私は好んでおり、岐阜のようにゆとりのある場所に来ると、まだまだ日本も捨てたものではないと思う。それよりもむしろ、今回2年振りに日本に一時帰国してみて、改めて日本全国をゆっくりと巡る旅をしたいという思いを強くした。

ビザ及び今後のオランダ永住権と欧州永住権取得に向けた制度の都合上、私はしばらくオランダから3か月以上離れることができないため――ひょっとすると、欧州永住権を取得しても欧州域内から3か月以上離れることができないのかもしれない――、日本全国をゆっくりと巡ることは難しい。仮にそうであったとしても、3か月以内に収まる形で何回かに分けて日本全国をゆっくりと旅したいと思う。その過程の中で、日記の執筆や曲を作っていきたい。それはどこか松尾芭蕉の俳諧の旅に似ている。

今、ホテルの受付にあった岐阜のガイドマップに目を通している。異なる種類のものを3つもらい、全てに目を通してみたところ、岐阜についてほとんど知らない自分がいることに気づいた。なにせ今回岐阜に来たのは、篠田桃紅さんの作品を見るためだけだったから、その他には岐阜について何一つ調べていなかったのである。岐阜駅に到着してすぐに気づいたのは、ここが織田信長や斎藤道三のゆかりの地であることや、長良川の鵜飼(うかい:鵜(ウ)という鳥を使ってアユを獲る漁法)が有名だということだった。手元にあるウォーキングマップを眺めると、斎藤道三が築いた城下町の足跡を辿れるコースが40分ほどとのことなので、明日か明後日にでもそのコースを歩いてみたい。
岐阜:2019/9/30(月)19:08

## 5002.【日本滞在記】岐阜で迎えた最初の朝に

岐阜で迎えた最初の朝。今朝は午前4時に起床し、時刻は午前5時を迎えた。岐阜の朝は東京以上に静かである。岐阜駅の間近くのホテルに宿泊しているのだが、銀座に宿泊していた時と比べて静寂さが際立っている。

今、ホテルの自室の窓から、城下町と反対側のビジネス街の方を眺めている。今日か明日には城下町を散歩してみたい。岐阜の街は落ち着きがあるのだが、ビジネス街の方を眺めていると、やはり私はこうした現代化された都市よりも、自然の中で生活を営みたいのだということを改めて思った。

昨夜に夜空を眺めていた時、ビジネス街の明かりのせいか、星が全く見えなかった。それでは自分の魂は落ち着かない。広大な夜空に輝く星が見たい。星の光が見たいと思った。また、乱立する人工的な建物の数々を眺めていると、それらがいくら束になっても、自然の荘厳な景観とエネルギーには足元も及ばないことに改めて気づいた。

自己をさらに育んでくれる自然の中へ。そんな思いが募る。

そうした場所は日本にもたくさんあるのだろうが、果たして自分はこの国で精神的に生きていくことはできるだろうか。昨日もそれについて考えていた。物質的な面では日本で生活を営むことは可能である。だが、精神的な面に関しては相当に疑問が残る。自分の魂はそれを望んでいない。昨日はそんなことを感じながら、岐阜の街を少しばかり散歩していた。

昨日は東京も岐阜も暑く、今日も気温が上がるらしい。天気予報を調べてみると、最高気温は30度、最低気温は24度とのことである。最低気温に関しては、フローニンゲンの倍以上高いことがわかった。オランダに戻る頃にはさぞかし寒くなっているだろう。今週の日曜日のフローニンゲンは、最高気温12度、最低気温7度と出ているではないか。しかしそうした寒さの厳しい場所での生活を、私は心底喜んでいるし、楽しんでいる。そこでの生活と充実感と幸福感は尋常ではないのである。通常の度量衡では決して測ることのできないものがそこにある。

午前8時頃を迎えたら、ホテルのレストランに降りていき、そこでフルーツとコーヒーだけいただこうと思う。コーヒーを飲んで一服したら、9時を目処にホテルを出発し、関市立篠田桃紅美術空間に向かう。岐阜駅から東海道線に乗って、美濃太田駅で乗り換えを一度する。そこで長良川鉄道に乗り換えて、関市役所前駅で降りる。ホテルから美術館まで合計で1時間半弱なので、それほど遠くない。今回の一時帰国の目的の一つは、小松美羽さんと篠田桃紅さんの作品を見るためだったので、本日、篠田さんの作品を鑑賞することがとても楽しみだ。岐阜：2019/10/1（火）05:30

## 5003.【日本滞在記】岐阜滞在初日に見た夢

遠くの方でカラスの鳴く声が聞こえた。宿泊先のホテルでは12Fの一室に滞在しており、そこからの眺めはいい。ふと窓の方に目をやると、空が徐々に明るくなってきている。時刻は午前5時半を迎え、この時間帯のフローニンゲンはまだまだ闇の世界であることをふと思う。

今朝方は印象に残る夢を見ていた。日本に戻ってきてからは、それほど印象に残る夢を見ていなかったように思う。いや、夢は見ていたのだが、それを書き留めることを忘れてしまっており、いつの間にやら記憶の彼方に夢が飛び去っていってしまっていたのだ。夢にも命があることを知る。その命が輝く瞬間と出会い、それを時期を逃さず捉えることができるか。それが大切なのだろう。

そういえば、昨夜は夢を見る前に不思議な知覚体験をしていた。時々私が感じる強烈な光を知覚する体験である。より具体的に言えば、意識が覚醒状態から半覚醒状態に移行する過程の中で、つまりグロスの意識からサトルの意識へと移行する中で、光輝く様々なイマージュを知覚していたのである。これをより鮮明にし、時間軸を伸縮拡張させれば、過去や未来を見ることができるのかもしれない。そのようなことを思わせてくれる知覚体験だ。

そこで見ていていたイマージュの数はおびただしく、万華鏡のように次から次へと別のイマージュに変化していくために、一つ一つのイマージュに対する記憶はない。しかし、中南米の伝統的な衣服であるポンチョを着たラテン系の男性のイマージュは、とても鮮明な記憶として残っている。

自分の意識世界の中には、うごめくイマージュの数々があることを知る。それは誰しもの中にもあるものだ。あとは意識を鍛錬し、それに気付くかどうか。こうしたイマージュをもとに曲を作ってみたい。

辺りは随分と明るくなってきた。それでは今朝方の夢について振り返り、早朝の作曲実践を行いたい。夢の中で私は、3人の友人に、自分が作ったカレーの試食をしてもらっていた。一杯目も自信作だったのだが、大事なスパイスの一種を入れ忘れていることにふと気づいた。

3人は試食後、すぐにどこかに行こうとしていたが、私は3人を呼び止め、もう一つスパイスを入れるとさらに美味しくなることを彼らに伝えた。すると、彼らは少しばかり面倒くさそうな表情を浮かべながらも、同時にカレーの味を楽しみにするような表情を浮かべて戻ってきてくれた。彼らにもう一杯カレーを出し、秘伝のスパイスを振りかけた。すると、その味が美味しかったのか、3人はとても満足そうな表情を浮かべた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、誰かが突然私のこの1年間の成績を発表した。最初よく事情が飲み込めなかったのだが、何やら、住んでいる地域を対象にした統一テストのようなものが定期的にあり、今年1年間のトータルの成績が発表されるとのことであった。

成績結果を発表する人が、「それでは、1位から発表します」と述べ、「普通は1位の発表は最後ではないか？」と思った。すると、「第2位、加藤洋平君！」と呼ばれ、その場にいた人たちが一斉に拍手をした。「1位からの発表ではなかったのか？」と思いながら、同時に自分が2位であることに驚いた。

私:「これは数学の結果だけですか？」

成績発表をした人:「いえ、様々な科目の合計の結果です」

3位以内に入ると、表彰状がもらえるらしく、名前を呼ばれた私は壇上に向かい、1位と3位の発表を待っていた。1位は、学業が優秀であった女性友達の一人(YY)か、男性友達の一人(MS)かだろうと思った。そこで夢の場面が変わった。岐阜:2019/10/1(火)05:55

## 5004.【日本滞在記】今朝方の夢の続き

少しばかり作曲理論に関する書籍を読んでいた。気がつくと、時刻は6時半を迎えていた。よくよく考えてみると、今回の滞在期間中、岐阜の城下町を散歩する時間はそれほどないことがわかり、明日の朝か明後日の大阪出発に向けた朝にでも散歩を楽しんでこようかと思う。夜明けとともに散歩に出かけ、城下町の散策をしてみるのも良いかもしれない。

早朝の作曲実践に取り掛かろうとしたところ、今朝方の夢の続きについて思い出した。夢の中で私は、どこかの城下町と外国が混ざったような場所にいた。そこでは祭りが催されていて、辺りは活気付いていた。

辺りを見渡すと、そこに小中学校時代の親友(KF)がいた。彼は私の顔を見ると笑顔になったが、なぜか突然逃げ出した。どうやら私たちは鬼ごっこをしているようだった。彼が逃げていく姿をしばらく見た後に、彼を追いかけなければならないと思った。幸いにも、追いかけ始めてすぐに彼の背中を捉えた。彼はくるりとこちらを振り返り、「まずい」という表情を浮かべて、近くにあった木造の階段をすぐさま降りて行き、どこかに身を隠そうとしていた。私もその階段を急いで降りると、そこには綺麗な小川が流れていて、水面が太陽の光で輝いていた。私はそれに一瞬見とれたが、彼を捕まえなければならないと思い、再び彼を追いかけることにした。

すると、彼は観光バスに乗ろうとしており、そのバスはスペインのアトレティコマドリードのホームスタジアム行きと表示されていた。それを見た瞬間、私はその行き先のバスに乗ってはならないと思った。すると、私の隣には別の友人(TK)がいて、あのバスに乗らなくて正解だと述べた。

友人(TK):「あのバスに乗っちゃ、ダメやよ。鬼ごっこしとる場合じゃないけん」

私:「どういうこと？」

友人(TK):「かっちゃん、まだ今回の祭りの税金を納めてないやろ。その係やったやん」

私:「えっ、そんな係やったっけ？」

友人(TK):「忘れたん？そうよ。今から戻ったら間に合うけん、早く！」

友人にそのようなことを突然言われ、私は祭りで上がった収益に関する税金を納めにどこかに向かった。行き先はよくわからないが、自分の足は勝手にそちらに向かっており、気がつけば私は走っていた。しばらく走ると、大柄なスキンヘッドの外国人に出会った。彼は流暢な日本語を話すことができる。彼を見た瞬間に、どうやら祭りの収益に関する税金は彼に支払う必要があることがわかった。そして、彼はドイツのネオナチに関係していることもわかった。彼はニヤニヤしながら、「遅いじゃないか」と述べた。彼が私の方に近寄ってきた時、私は殴られるかもしれないと思ったが、それは杞憂に終わり、彼に税金を手渡そうとしたところで夢から覚めた。

昨日の朝は、岐阜に行く前に銀座の二つの店で免税の手続きをしていた。それが今回の夢に何か影響を与えていたのかもしれない。そして、夢の中の城下町は岐阜の城下町と重なっているものがあるかもしれない。岐阜:2019/10/1(火)06:46

## 5005.【日本滞在記】関市立篠田桃紅美術空間を訪れて

時刻は午後の7時を迎えた。今、岐阜滞在の2日目がゆっくりと終わりに近づいている。今日の岐阜は真夏日のように暑く、むしろその暑さは日本の夏を思い出させてくれたが故に有り難かった。

今日は、関市立篠田桃紅美術空間に足を運んだ。朝の9時前にホテルを出発し、岐阜駅からまずは高山線に乗って美濃太田駅に向かった。そこから乗り換えをした時の列車はとてもレトロであり、なんと1両編成であった。1両編成の列車に乗ったのは初めてだったかもしれない。もしかしたら過去に乗ったことがあるのかもしれないが、最後に乗ったのがいつか思い出せないぐらいである。

美濃太田駅から関市役所前駅までの風景は、想像通りにのどかであった。駅に到着後、市役所まで歩いていると、セミの鳴き声が聞こえてきた。その鳴き声はとても懐かしく、私は思わず足を止めて、セミが止まっている木の方を仰ぎ見た。なんと懐かしい音色だっただろうか。

今日から10月に入ったが、日本の夏を思い出させてくれたセミには大変感謝している。きっとあの鳴き声は、セミが自らの短い命を振り絞って放ったものだったのだと思う。

駅から歩いてすぐのところに市役所があり、早速私は7Fにある篠田桃紅美術空間に向かった。無事に到着すると、そこにはとても落ち着いた空間が広がっていた。確かに館内はワンフロアであり、とてもこじんまりとしているのだが、篠田さんの代表作とエッセイが記されたパネルには大変得るものが多かった。とりわけ、篠田さんの「無」についての思想が大変興味深かった。

パネルを読みながら、ふと自分の作曲実践に引きつけて、究極的な音もまた無なのかもしれないと思わされた。あるいは仏教思想的には、空（くう）なるものなのかもしれないと考えた。そこから私は、空なる音を求めていく道のりがおぼろげながら見えたように思えたのである。

無のように全てを包摂する空に至るにはどうすればいいのだろうか。一つの手段としては、有から無に至る道筋があるだろうか。無に直接分け入って行くことは難しいように思うため、当面は、有なる音を生み出すという方法をもってして無を探求してみよう。

篠田桃紅さんは音を形にしていくという大変興味深い発想を持っておられ、私はそれとは逆向きに形を音にしていくというアプローチを取りたい。自分の内側に溢れている目には見えない感覚や世界を、音という形にしていくのである。そうした思いを一段と強くした。

今日はこれから一日を締めくくる作曲実践をしたい。その時は、上述の二つの事柄を特に意識する。

© YOHEI KATO 2019

美術館を出発しようとした時に、出口で思わぬ出来事が起こった。美術館を出るときに、「加藤さん・・・？加藤さんですか？」と声をかけられたのである。なんとそこには、知り合いの方がいらっしゃった！その方とは直接お会いしたことがなく、これまではオンラインでやり取りをさせていただいていただけであり、対面したのは初めてだった。

本当に偶然の対面で私は驚き、帰りの列車の時刻が迫っていたので長くは話ができなかったが、思わず3回も握手をしてしまうぐらいにその偶然の出会いを喜んだ。思い起こせば、今回の一時帰国中には、この一週間の間にもう何度も幸運な偶然が重なっている。今回の旅には何かあるに違いない。幸せを運んでくれる何かがきっとある。やはりここは、私を優しく抱擁してくれる母国だ。岐阜：2019/10/1（火）19:19

## 5006.【日本滞在記】家族で旅をしたあの日あの時

目を覚ますと私はまた日本にいて、人生の新たな一日が始まったことに驚く。

私はまだ日本にいる。そして望むと望まぬとにかかわらず、人生は有無を言わせぬ形でまた新しい一日を私に届けてくれた。人生の終わりもまた有無を言わせぬ形でやってくるのだろう。人生は絶えず有無を言わせないのだ。人生における新たな一日も終焉も、それは有無を言わせぬ形でやってくるのである。

日本をこうして転々と旅をしていると、幼少期の懐かしい感覚が蘇ってくる。その感覚は大人になるにつれて変容し、それはいつしかこの国に対する違和感ないしは嫌悪感のようなものになっていった。だが今は、そうした感覚が再び変貌を遂げて、幼少期のそれと外形上は似たものになっている。そうそれは、外形上は似ているのだが、質的には全く違うものだと言えるかもしれない。

幼少期の頃、両親は私をよく旅に連れて行ってくれた。父が休みを取ることができれば、いかに短くても必ずどこかに家族旅行に出かけていた。日本国内の旅行であれば、父が運転する車に乗って、私たちは様々な場所に旅に出かけた。東京で生活をしていた頃は、東京から車で行ける範囲の距離にある都道府県に旅行に出かけ、山口県に引っ越してからは、中国・四国・九州地方を回った。本当によく旅行に連れて行ってもらった。思い返してみると、今の私の考え・感覚・発想・行動などは全て、両親に連れて行ってもらった旅によって育まれたものなのではないかと思う。

旅行に出かける時はたいていキャンプをしたり、キャンプ場がなければ旅館に泊まった。記憶にある限り、東南アジアの旅行を除けば、家族で旅行に出かける際にはホテルなどに宿泊したことはほとんどないのではないかと思う。

今になってみるとわかるのだが、両親は本当にわかっている人なのだと思う。企業勤めで疲労がたまっていたであろう父は、休暇を家でゴロゴロする形で過ごすのではなく、家族で旅行に出かける形で過ごすことを常にしていた。宿泊先が仮にホテルであれば、その旅はとても無味乾燥的なものになっていたのではないかと思う。物質的なものに覆われた旅ではなく、豊かな自然に囲まれてキャンプをしながら家族で過ごすことができたことは、どれだけ幸運で有り難かったことだろうか。今になって初めて、その有り難さがわかる。

大人になり、国の外で生活することが長くなればなるほど、私は両親と過ごした幼少期のことをふとした時に振り返る。そのたびにいつも、両親は物事の本質がわかっているように思えるのである。その一つの表れが、旅に出かけること、及び旅の仕方に現れている。もし仮に私にも家族ができたら、同じようにできるだろうか。必ずや同じように家族で旅行に出かけたい。

両親は私を進学塾などに通わせるような馬鹿ではなく、勉強を強制するような馬鹿では決してなかった。それは私がまだ東京という受験戦地で生活をしていた時ですらそうだった。とにかく両親は、私に多くの直接体験を積ませてくれたのである。それが影響してか、私は岐阜に到着した日に街を歩きながらふと、もし自分に子供がいて、一緒に岐阜に旅に出かけたら、鵜飼を見ることや伝統工芸品を作ることを一緒に行っただろうと思う。

もし欧州の地で家族ができたら、飛行機の旅をできるだけ避け、キャンピングカーで陸路を移動して、家族で欧州中をキャンプしたい。あるいは、船旅を一緒にしたいと強く思う。子供が日本の外で生まれたら、日本に旅に出かける際には、なおさら日本の伝統的かつ地域的・文化的な体験を積ませてあげたいと思う。

小学校5年生の時に、学校があるにもかかわらず家族で四国や九州に旅行に出かけたあの日のことを思い出す。私は大学に進学し、大学院まで卒業したが──しかも大学院は3回も卒業した──、そこまで勉強に打ち込むことができたのも、両親が私に勉強を一切強要しなかったからだと思う。

© YOHEI KATO 2019

大学院を卒業して学びが終わったわけではなく、今もこのようにして生涯学び続けるという姿勢と胆力を持つことができたのは、両親のおかげであったということが今ならわかる。私も子供に学びを強要することは決してないだろう。間違っても学校の勉強を強いるようなことはしない。むしろ、そうした勉強をしないように強いる可能性が高いことの方に注意が必要だ。これから夜が明けようとする岐阜の空の下で、そのようなことをぼんやりと考えていた。岐阜:2019/10/2(火)04:45

## 5007.【日本滞在記】確かな変貌:有矛盾かつ無矛盾なる人生

変わった。確かに自分は変わった。今回の日本への一時帰国に際してそのように思う。日本を見る目・感じる心の全てが変わったのである。この8年間日本に対して抱いていた諸々の感情・感覚・考えが溶解し、そこには新たな感情・感覚・感覚の芽が生まれていた。そうそれは、もう生まれていたのである。

とにかくこの8年間において日本に一時帰国する際には、常に寂しさと侘しさ、そしてある種の絶望感のようなものが絶えず自分の身をまとっていた。本当に寂しく、本当に侘しく、本当に絶望的だった。

日本に滞在している時に気を抜くと、辛さの波にのまれそうになる自分がいたのである。そうした状態になっていたのはなぜだろうか。最大の要因は、私が日本という国を対象化し、それと極度に大きな距離を図ろうとしていたからである。端的には、日本との間に巨大な溝が生まれていたのである。その溝が自らを苦しめていた。

今回日本に一時帰国してみると、なんとそうした溝が消えていたのである。日本と私との間にあった幾重にも及ぶ膜が溶解し、薄皮一枚もない形で日本と自分が一体になっている感覚がする。これを持って私は、日本を客体化する極地に至ったのではないかと思った。

日本と自己を二分するゲームが終わっていたのである。そうしたゲームが終わり、日本と自己が深い部分でつながるという現象がようやく生じた。それがもたらしたのが、今こうして感じているこの感覚だ。この感覚をまだ言葉で説明する必要があるだろうか。その必要性はあまりないように思われる。言葉で説明するには限界があるのだ。であれば、絵や曲の形にしよう。

実家に帰ったら、父に絵を描く道具を借りよう。エアブラシのような凝ったものを借りる必要はなく、絵の具や色鉛筆程度のものでいい。今回の一時帰国に際しては、荷物の都合上、水筆色鉛筆を持ってこなかったのだ。新たに芽生えたこの感覚を言葉以外の形にしてみよう。

自分の内側の目には見えない感覚を形にしていくことの大切さと情熱については、全く同じことを篠田桃紅さんと小松美羽さんが述べていたことに驚き、大いなる共感の念を持った。

自分の中で移ろいゆき、そして育まれていく感覚を形にしていくこと。それを私はこれからも毎日行っていきたい。毎日だ。しかもそれを人生の終わりの日まで、終わりの瞬間まで行っていく。

どうやら始発列車が出発したようだ。岐阜駅を列車が通過していく音が聞こえた。

人生における新たな列車が今出発せんとしている。いや、私たちの人生の本質は絶え間ない出発なのだから、本当は私たちは毎日新たな列車に乗ってどこかに向かっているのだ。それに気付けるだろうか。始発列車の味わい、そして終列車の味わい。

列車は毎日出発し、毎日帰途につく。あぁ、私たちの人生はひょっとすると、列車というよりも、線路そのもの、ないしは不動の大地なのかもしれない。

私たちの自己は線路や大地の上を動く列車であったとしても、人生そのものは不動な存在なのかもしれない。人生は移ろいゆくものであり、不動でもあるということ。いやはや、人生はかくも有矛盾かつ無矛盾なるものであったか。

今朝もまたカラスが外でカァーカァーと鳴き声を上げた。その鳴き声は矛盾だらけであり、一切の矛盾がない。それは人生そのものではないか。岐阜：2019/10/2（火）05:14

## 5008.【日本滞在記】加藤栄三・東一記念美術館へ：手紙

時刻は午前5時を迎えた。今朝は3時半過ぎに起床し、オランダでの生活と同様に、持参したココナッツオイルでオイルプリングをしながらシャワーを浴びた。オランダではヨガをしながらオイルプリングをしているのだが、一時帰国中においてはシャワーを朝に浴びるようにしている。

ホテルの自室の窓から外を眺めると、深夜に雨が降っていたらしいことがわかる。今日は、岐阜の城下町を歩こうと思う。ゆっくりと城下町を歩き、ゆっくりとそれを堪能する。ゆっくりとでいいのだ！

落ち着きと高揚感が自分の内側から自ずから生まれてくる。こうした自ずから生まれてくるものをとにかく大切にしよう。大切にそれを見守り、育んでいこう。物質的な現代社会はそれを抑圧し、奪おうとする。本当にそうだぞ。そのように自分に言い聞かせる。

本当は今日は、岐阜現代美術館に行き、篠田桃紅さんの作品を見る予定だった。だが、昨日訪れた関市立篠田桃紅美術空間の係員の方が親切にも、今は現代美術館には篠田さんの作品が展示されていないとのことであった。それを教えてもらったおかげで、無駄足を運ぶ必要がなくなった。

岐阜現代美術館は少し不便な場所にあり、最寄駅から歩いていくことは実質上難しく、バスやタクシーを使っていく必要がある。そうした手間があったので、現代美術館に無駄足を運ぶことを免れたことは嬉しいことであり、何よりもそのおかげで、今日は岐阜市内の城下町を散策することができるようになった。調べてみると、市内にはたくさんの寺や神社がある。岐阜に宿る神仏のエネルギーを感じるのはそのためだったか。

岐阜市内での滞在は今日で三日目だが、今のところ市内では、岐阜駅とホテルの往復だけで済んでおり、城下町の方には一切足を運んでいないのだが、ホテルの自室からでも神仏のエネルギーをひしひしと感じる。今日はそのエネルギーの根源地に向かっていく。

色々と調べてみると、偶然にも加藤栄三・東一記念美術館という美術館を見つけた。私はこの二人の兄弟画家について何一つ知らなかったのだが、調べてみると、実に見事な絵を描いていることに驚き、今日は午前中にこの美術館を訪れようと思っている。

今日の予定は、城下町を歩いて堪能することと、その美術館に訪れること、長良川を見ることぐらいだろうか。細かなもので言えば、城下町からホテルまでの帰り道に書店に立ち寄り、篠田桃紅さんのエッセイか何かを購入したい。あと忘れてならないのは、美術館に立ち寄る前に郵便局で手紙を出すことである。昨日、ある二人の方に手紙を出そうと思った。

© YOHEI KATO 2019

欧米生活をしていると、普段日本語で文字を書くことなど一切なく、数年ぶりに日本語で文字を書いてみると、字があまりにも下手になっていることに驚いた。言い訳としては、数日前に銀座で行ったボルダリングによって握力が奪われ、まだそれが回復しておらず、ペンをうまく握れなかったのだが、それにしても字が下手になっていることには驚いた。しかしその分、誠心誠意、魂を込めるようにして手紙をしたためていった。その手紙は、端的にはお礼の手紙である。それを今日、城下町に繰り出す前に、岐阜中央郵便局で投函しようと思う。

ふと窓の外を見ると、空が明るくなり始めていた。岐阜で過ごす今日という一日も、至福さと充実感に満ち溢れたものになるだろう。岐阜：2019/10/2（火）05:35

## 5009.【日本滞在記】加藤栄三・東一記念美術館を訪れて

時刻は午後の3時半を迎えた。雨が降る前にホテルに戻ってきた。今日の岐阜は昨日ほどには暑くなく、何とか天気がもってくれたことは有り難かった。今朝はホテルをゆったりと10時ぐらいに出発し、城下町を歩きながら、加藤栄三・東一記念美術館に向かった。その道中で、昨日書いた手紙を岐阜中央郵便局で出してきた。手紙が無事に届いてくれることを祈って郵便局を後にし、目的地に向かっていった。

宿泊先のホテルから美術館までは歩いて50分ほどであり、良い運動になった。「財布・携帯・プロテイン」が旅の三種の神器となっており、今日もオーガニックソイプロテイン（プロテイン含有量90%）とオーガニックカカオパウダー（こちらもプロテインがそれなりに含まれている）を混ぜたものを持参した。

旅の最中は本当によく歩き、ボルダリングをしていなくても体の筋肉が良く鍛えられる。自分の筋肉の様子を観察していると、ウォーキングがいかに良い運動になっているかを実感するばかりである。それは身体的に良い影響を及ぼすだけではなく、思考や心にも良い影響を及ぼす。

美術館に向かうまでの城下町は落ち着いていた。ただし気になったのは、今日が平日であるためか、通りはとても閑散としており、岐阜の県庁所在地がある岐阜市がそれほど活気がないように思えてしまった。特に気になっていたのは、平日の午前中に道を歩いてすれ違う人がお年寄りばかりであり、私と同年代の人や年下の人たちを見ることはほとんどなかった。確かに同年代の人たちは働

き盛りであり、建物の中にいるのかもしれず、私よりも若い人たちは学校に通っている時間なのかもしれない。とはいえ、本当に若い人をあまり見かけなかったことには少々驚いた。

目的地の美術館は、岐阜城の麓にあり、到着後すぐに作品を楽しむことにした。加藤栄三・東一については、一昨日に偶然知ったのであるが、今回この美術館に足を運ぶことができたのは偶然の産物であり、二人の作品を楽しむことができて嬉しく思う。

加藤栄三の作品の中では鵜飼をモチーフにした絵が大変素晴らしく、東一の作品に関しては風神をモチーフにした作品の迫力が素晴らしかった。館内にその他の客はほとんどおらず、腰掛ける椅子が空いていたので、そこで靴を脱ぎ、二つの作品をぼんやりと気の済むまで眺めていた。気が済むまで作品を眺めた後に、ホテルに戻る前に、近くの高島屋に足を運び、そこの書店に立ち寄って、篠田桃紅さんのエッセイを三冊と、『辻邦生　永遠のアルカディアへ』を購入した。それらの書籍は、今からホテルの自室で読み、実家に戻る際の新幹線の中や実家でゆっくりと読みたい。岐阜：2019/10/2（火）15:46

## 5010.【日本滞在記】歌を歌うように、祈りを捧げるように作曲を

――静かな眼　平和な心　その他に何の宝が世にあろう――三好達治

時刻は午後6時半を迎えた。岐阜の街もすっかり闇に包まれた。

あぁ、今日もまたとても充実した一日だった。一方で、今日の時の流れは激流のように早く、それに途中で気づいた私は思わず笑った。そうした笑いが起きたのは、岐阜市内の商店街でのことだった。

日々、自分の眼に映る事柄がこれほどまでに新鮮であることに驚く。新鮮であるがゆえに驚きと感動がそこにあり、そうした驚きと感動に浸っていると、一日があっという間なのだ。

この世界に生を受けたばかりの好奇心旺盛な幼児たちの内面世界がよく分かる。彼らのように新鮮な眼で世界を眺め、彼らのように平穏な心で世界を眺めること。そうしたことを一瞬一瞬行っていると、一日が一瞬という名の時の粒になる。こうした時の粒を数珠つなぎにしていけば、それは自分の

一生となるのだろうか。それは紛れもなく自分の一生となり、それでいて自分の一生を超えるような気がしている。

自らの人生が自らの人生を超えていくこと。その様子をすでに今この瞬間にも目撃しているように思えるのは気のせいだろうか。気のせいではないだろう。日本に一時帰国する前後あたりから、日記で書く文章が幾分自分の歌のように思えてきた。それもまた気のせいではないだろう。

言葉はもともと歌だったのだ。歌が言葉だったというよりも、言葉が歌だったのである。そして、言葉は歌であるばかりは、言葉は祈りでもある。

自らの歌は、自らの祈りである。歌を歌うことは、祈りを捧げる行為である。何に対して祈っているのかわからないが、今、岐阜の夜空を眺めながら、私は確かに何かに祈りを捧げている。

今日は旅行中にもかかわらず、4曲作った。確か今日は午前3時半過ぎに起床し、岐阜の城下町に繰り出す前に3曲作った。4曲目は、夕食を摂り終えた後に先ほど作った。

曲を作ることは本当に楽しい。もっと作曲について学習がしたく、そしてもっとずっと曲を作りたい。曲を作ることは、自分の歌を歌う行為となり、祈りを捧げる行為となった。

日本に滞在する時間は、明日からの大阪滞在とその後の山口県の実家での滞在を含めてもうしばらくある。今、ちょうど半分の折り返しを迎えた頃だろうか。

日本に滞在期間中にも、着実に作曲に関する学習を行い、少しでもいいので毎日曲を作っていく。日記を書くように曲を作っていくことは、世界に対して祈りを捧げる行為となり、世界と深く繋がる営みとなった。私は私なりの祈りをこの世界に捧げていく。

静かな眼で世界を直視し、平和な心を持って祈りを捧げるように曲を作っていくこと。自分の人生は、このとんでもなくシンプルな営みの連続によって形作られていく。岐阜：2019/10/2（火）18:40

## 5011.【日本滞在記】魂の救済に向けて

――自己の内面は純粋に透明化することによって、外面世界と完全に一体化する――辻邦生

午後に加藤栄三・東一記念美術館からホテルに向かっている帰り道、ツツジの木を見た。その芳しい香りに足をピタリと止め、しばらく私は街路に受けられたツツジの木を眺めていた。そこから再び歩き始めると、今度は宙にひらひらと舞うものを見つけた。それは、鳥の白い羽だった。空にひらりひらりと舞う羽を眺めながら、その羽をつけていたのはどのような鳥だったのだろうかと思いを馳せた。

昨日は、高山線に乗って美濃太田駅に向かっている最中に、自分の席の手すりにバッタが止まっているのを見つけた。私は好奇心旺盛にバッタを眺め、そっと触角を触ってみた。嫌がるかと思ったが、バッタは少しも気にかけていないようだった。

自分に小さな子供でもいれば、その場でもっとバッタと戯れたり、今日であればツツジの香りを嗅いだり、空に舞う白い羽を追いかけたりすると思うのだが、さすがに30歳を超えた男性がそんなことを列車の中や街中で行っていたら奇妙に思えるだろうというぐらいの社会的な心はある。だがそれはもしかしたら必要ではないのかもしれない。もっと無邪気に生きてみてもいいのかもしれない。

空に舞う美しい白い羽を見送った後、私はホテルから比較的近くにある高島屋に立ち寄り、そこの書店に足を運んだ。そこで篠田桃紅さんのエッセイを3冊購入した。昨日すでに1冊を岐阜駅の中の三省堂で購入しており、それを今朝方に食い入るように読み切ってしまったため、その他のエッセイも読みたくなってしまったのである。そうしたこともあり、書店の店員さんにすぐに声をかけ、篠田さんのエッセイが置かれている場所を教えてもらい、そこに置いているエッセイを全て購入した。

そして偶然ながら、今回の一時帰国中に買いたいと以前思っていた書籍をふと思い出した。それは、『辻邦生　永遠のアルカディアへ（2019）』という書籍である。なんと幸運にも、その書籍が一冊だけ店内に置かれており、店員さんにそれを持ってきてもらった。ページを開いてパラパラと中身を眺めていた時に、「芸術による魂の救済」という文字を見つけ、その文字を見ただけでもうどうしようもなくこの書籍を手元に置いておきたくなった。

今回の一時帰国では、群馬県で小松美羽さんの個展を鑑賞し、岐阜県で篠田桃紅さんの作品を鑑賞した。私は決して、小松さん、篠田さん、辻先生のような芸術家ではないのだが、「芸術による魂の救済」という言葉にはどこかグッとくるものがある。レジの前でその言葉を心の中で読み上げて

いた私に、感極まるものがやってきて、感涙がこぼれそうになった。自分は芸術家でも作曲家でもないが、自分の言葉を綴ること、そして曲を生み出していくことは、この世界に対して祈りを捧げることであり、魂の治癒と変容、そして救済をもたらすことになりはしないかという願いにも似た気持ちがある。

明日もまた人知れず起床し、人知れず言葉と曲を生み出していく。魂の救済に向けたその活動は、自己を純化させていき、自己と世界を完全なるまでに同一化させるだろう。そこにまた、自己と世界との新たな関係があり、その関係が自己と世界をさらに育んでいく。岐阜:2019/10/2(火)18:59

## 5012.【日本滞在記】岐阜を出発する朝に

時刻は午前4時半を迎えた。今朝はちょうど4時あたりに目覚め、そこからココナッツオイルでオイルプリングをしながらシャワーを浴びた。岐阜県はまだまだ暑く、クーラーが必要なぐらいだが、そうした機械に頼ることなく、できるだけ自分の身体の調節機能に立脚する形で過ごしている。ひとたびクーラーを使ってしまうと、自分の内側の感覚が狂ってしまうような気がしており、何よりも身体の調節機能を麻痺させてしまうことを招いてしまうように思うのだ。そうしたこともあり、昨夜もクーラーをかけずに寝ていた。そのため、朝起きると寝汗を随分とかいており、そうしたことから起床直後にシャワーを浴びるようにした。これは日本に来てからほぼ毎日続いている。

私の中では、寝汗をかくというのはある意味良いことであり、逆にクーラーに依存して寝汗がかけないということの方が問題ではないかと思う。汗をかくことによるデトックスなどを超えて、汗をかくことによって身体が外部環境に自ずから順応しようとしていることに気づくのだ。クーラーをかけてしまうと、こうした機会を奪ってしまいかねない。

日本に来てからもオランダでの生活と同様に心身の調子がすこぶる良いのは、クーラーをつけないなどを含め、種々の小さな心がけによるだろう。その中にはもちろん、添加物や化学調味料をできるだけ避け、オーガニックな食材を積極的に摂るということや、日中はよく歩くことなどが含まれる。今日はとりわけ心身の調子が良い。オランダで毎日感じているあのみなぎるようなエネルギーが内側を流れている。日本に来てからすでに1週間が経ったが、この状態になるまでにそれくらいに時

間がかかった。自分の心身が緩やかに日本に適応していった感じである。今日から仕事の関係上、大阪に滞在する。

岐阜のホテルを出発するのは、朝の9時半前であり、岐阜駅から東海道線で名古屋まで行き、名古屋から新大阪まで新幹線で行く。今回岐阜を訪れて気づいたが、岐阜と名古屋までは東海道線でわずか2駅(20分)と近く、東京や大阪にもすぐに行けてしまうということだ。何よりも、岐阜の落ちついた感じには大変好感を持った。ぜひまた岐阜を訪れ、今度は長良川で鵜飼を見たいと思う。

今日から二泊三日で大阪に滞在する。大阪に行くのは何年振りだろうか。今回は協働者の方のオフィスにあるスタジオで、成人発達理論に関する撮影を行う。本格的なスタジオで動画の撮影をするというのは初めての体験であり、心が躍る。少し前に始めたYoutubeとは異なって、本格的な機材を用いてスタジオで動画を撮影するというのはどういうものなのかと胸が高鳴る。今日もまた好奇心を全開にしておこう。

心を常に開いておき、今日もまた自己の精神と魂を大いに育んでいこう。精神と魂にとっての養分は、好奇心を開くことによって自己に流入してくる全ての現象である。岐阜の静かな朝にそのようなことを思う。岐阜:2019/10/3(木)04:56

## 5013.【日本滞在記】10年越しの何かに期待して:今朝方の夢

気づけばあの日からほぼ丸10年経った。ちょうど10年が経ったのではないかと思う。本当に何かの偶然なのだろか。

今日から大阪に移動し、滞在先のホテルは奇しくも、10年前に自分の人生を大きく変えてくれたケン・ウィルバーの書籍と出会ったジュンク堂書店大阪本店の眼と鼻の先にある。あの日から早くも10年である。この10年での日々を少しばかり振り返る。いや、それは自然と思い出される。

今回の滞在中は書店に立ち寄る時間はないかもしれない。あるとすれば、ホテルをチェックアウトし、実家に向かう日の朝ぐらいだろうか。ひょっとすると、10年越しにまた何か重要な書籍と出会う可能性があるため、大阪を出発する朝にジュンク堂に立ち寄ってみようかと思う。

岐阜を出発する今日の明け方に、私は夢を見た。夢の中で私は、今も現役で活躍するサッカーポルトガル代表のエースと会話を楽しんでいた。実際には、彼はあまり英語が堪能ではなく、話せることは話せるのだが、こちらの質問をしっかり理解することは難しいようだった。終始彼は笑みを浮かべて、気さくに言葉を発していた。そのような場面があったのを覚えている。

そこからの二つの夢もサッカーに関するものだ。次の夢の場面では、日本代表の期待の星であるとても若い選手と一緒にサッカーの練習をしていた。特にシュート練習に力を入れており、シュートを打った後には、お互いにフィードバックし合うということをしていた。彼は私よりもひとまわりも若いのだが、年齢を感じさせないほどに成熟した自己を形成しており、そうした自己を持っていれば欧州の地でも十分にやっていけるだろうと思った。サッカーの技術云々の前に、そうした自己がなければ欧州の地でやっていくことは至極難しいことだろう。

彼は私に敬語を使い、選び抜かれた言葉を話しているように思えた。彼にはサッカーのセンスのみならず、言葉の選び方にもセンスがあると思わされた次第である。そのような夢を見た後に、最後の夢の場面では、元日本代表の名選手と、元フランス代表の名選手がFK対決をすることになっていた。私も二人に混じり、三人で対決を楽しむことにした。

この対決で用いられるボールは特殊であり、ひとたびボールを蹴ると、ボールが消えてしまうのである。最初、元フランス代表の選手がゴールキーパー役を務め、元日本代表の選手がキッカーとなった。その選手がボールを蹴ると、ボールは消えた。しかし、ボールが左のポストに当たり、そしてボールは跳ね返ってゴールの右のネットを揺らした音が聞こえた。ゴールキーパー役の元フランス代表の選手は一歩も動くことができず、素晴らしいキックに思わず笑みをこぼしていた。

今度は私がキッカー役を務めることになったのだが、サッカーボールが突然スーツケースに変化し、そのスーツケースを蹴ることが求められた。果たしてスーツケースを無事に蹴れるのか？そんなことが脳裏に浮かびながら、私は助走を始め、スーツケースの左横に軸足を置き、スーツケースをまさに蹴ろうとした瞬間に夢から覚めた。

時刻は午前5時半を迎えようとしている。今、岐阜駅を列車が通過していく音が聞こえた。これから作曲実践をし、その後に出発に向けた最終荷造りを始めよう。岐阜：2019/10/3（木）05:28

© YOHEI KATO 2019

## 5014.【日本滞在記】大坂滞在二日目の朝に

時刻はちょうど午前7時を迎えた。今私は、大阪梅田駅の近郊のホテルにいる。ホテルの窓から見える景色は、どこか懐かしさを感じさせる。というのも、私は最初のキャリアの時に、大阪に住んでおり、まさに今いる場所の近くで働いていたからである。

今回大阪に訪れたのは、協働者の方と一緒に仕事をするためである。具体的には、成人発達理論をもとにした動画コンテンツを専用のスタジオで撮影するというものである。ここ最近自らのYoutubeチャンネルを作ったのだが、こうした専門スタジオで動画を撮影するという体験をすると、これまでのYoutubeチャンネルでの動画作成とは随分と異なるものであることに驚かされた。

専用スタジオに備えられている器具はどれも初めて見るものばかりであり、私の眼は好奇心で満たされており、協働者の方との対談形式で行われる数時間に及ぶ撮影を始終楽しむことができた。そこには、新しい体験に常に開かれた自分がいた。こうした自分を大切にしていこう。そして、新しい体験も合わせて大切にしていこう。いやひょっとすると、体験というのはいかなるものであっても常に新たな要素を内包しているのだから、とにかく新たな体験に開かれた自己をさらに育んでいくことの方が大切かもしれない。自己が新たなものになれば、一見すると既に体験したことのあるものでも、それは新たな体験となる。そうではないだろうか。

今日は久しぶりに寝坊をした。だが、午前6時に起床してしまった自分を責めることはしない。日本に一時帰国をしてからは、たいてい3時頃か4時前に起きていた。今日も一度3時半に目が覚めたのだが、昨夜はいつもより一時間ほど遅い11時頃に就寝したため、それを踏まえてもう少し寝ることにしたのである。

昨日の夕食は、協働者の方々とご一緒させていただいた。夜に会食をするというのは何年振りのことだっただろうか。協働者の方は、私が肉類をもはや食べないということ、食材はオーガニックなものを摂るようにしていることなどを知ってくださっており、多大な配慮をしてくださって店を選んでくれたことを大変有り難く思う。その店は新鮮な有機食材をふんだんに使っており、一品一品にこだわりを感じられた。それが味に滲み出ていたのである。

その店での料理は絶品であり、協働者の方々との話に彩りを加えてくれた。食はこのように、単に栄養を補給するという役割を担うだけではなく、食事を共にする人との対話に花を添えてくれるのである。協働者の方々にせよ、その店にせよ、とても豊かな時間を過ごさせてくれたことに感謝をせねばなるまい。大坂:2019/10/4(金)07:20

## 5015.【日本滞在記】楽しみと喜びで満ち満ちた大海の中で

今私は、宿泊先のホテルの窓から大坂のビジネス街を眺めている。確かにその景色は多分に無機質だが、それはどこか無調の音楽を奏でているかのようにも感じられる。何よりも、こうしたビルが立ち並ぶ景色を眺めていても、自分の心は動じずにくつろいでいて、この景観そのものをそっくりそのまま受け入れている自分がいる。こうした眺めに嫌悪感を抱くこともなく、むしろこの景観の中にただいることを受け止めている自分がいるのである。

大坂の街は、昨日夕方に雨が降った。それは一時的なものであり、夜にはすっかり雨が止んでいて、秋の夕風を浴びることができた。今日の大坂の天気は申し分なく、最高気温は28度まで上がるそうだが、秋晴れと評していいであろうこの天気の良さには感謝をせねばなるまい。

午前7時半を迎えようとしている大坂の街に朝日が降り注いでいて、それがビルの窓ガラスに反射している。人工物であるからといってそれを否定してはならない。

今このようにして自分が紡ぎ出している言葉や、毎日生み出している音楽も、自分という一人の人間が産み出した人工物であるとみなすことはできなくもない。広義の意味において、それらは人工物である。こうした人工物にも精神や魂は宿っているのである。そうであれば、今目の前に乱立する巨大なビル群にも、作り手の精神や魂が宿っていると考えてもおかしくはないだろう。忌避すべきは、精神や魂の宿っていない無駄な人工物なのであり、精神や魂が宿ったそれは大切にすべきものになる。

4年前に一度、知人の税理士さんに会いに大阪に訪れたことがあった。その時はちょうど、オランダで生活を始めることが決まっていた時だったと思う。大阪に足を運んだのはそれ以来であり、梅田駅そのもの、そして駅周辺が様変わりしていることに驚かされる。街というのも呼吸をしており、発達するものなのだということを改めて感じる。大阪は、この4年間の間に呼吸を続け、独自の発達運動

をし続けていたようなのだ。新たな姿を持って目の前に立ち現れた大阪の姿を見て、私の眼は好奇心で見開かれ、大阪の街を歩く一歩一歩を楽しんでいた。

今日はこれから、いつもと変わらずに作曲実践をして、10時前に協働者の方のオフィスに向かう。今日もまた午前と午後を使って、特設スタジオで動画撮影を行う。その後、今日は夕方に立命館大学梅田大阪キャンパスにて、セミナーを開催させていただく。40名を越す方が参加してくださるということであり、とても有り難い限りである。

セミナーが終了したら、協働者の方々とボルダリングを楽しむことになっている。私の方から誘い、私を含めて4名でボルダリングを楽しむ。ちょうど、立命館大学梅田大阪キャンパスから歩いてすぐのところに「アーバンクライミングクラブ カワセミ」というボルダリングジムがあり、そこでボルダリングをご一緒させていただくことになった。今日の動画撮影にせよ、セミナーにせよ、ボルダリングにせよ、そして自分が次に書く日記にせよ、作曲にせよ、日々がこうも楽しみに満ち満ちていることに驚きと感謝の念を持つ。日々は、楽しみと喜びで満ち満ちた大海であったか。大坂：2019/10/4（金）07:39

## 5016.【日本滞在記】10年の時を経て：導きに導かれた人生

10年の時を経て、今私は、大阪の堂島のホテルにいる。なんとも運命的なのは、今私が宿泊している真横（真ん前）には、自分の人生を変えてくれた書籍との出会いをもたらしてくれたジュンク堂書店大阪本店がある。そう、その書籍とは、アメリカの思想家ケン・ウィルバーの『万物の理論』という書籍である。驚かされる偶然は、絶版となっていたその書籍を2019年の初夏に監訳出版させてもらったことである。

自分は戻ってきたのである。自分は帰ってきたのである。帰りながらにして新たに進んでいるのである。正確には、自己に「還り」ながら、新たな自己に向かっているのである。そのようなことを感じる。

偶然はまだ続く。今からちょうど10年前の今頃だったのではないだろうか。社会人になって数ヶ月が経った私は、京都のあるクライアント企業の訪問の帰りに、啓示的な気づきを駅のプラットフォームで受け、会社に戻ってから居ても立っても居られなくなり、勤務時間中であったがオフィスを抜け出して、ジュンク堂書店大阪本店に向かったのである。まさに、何かに導かれるようにしてこの書店に

向かったとしか言いようのない体験であった。そしてそこで私は、自分の人生を大きく変えてくれる書籍に出会うのである。

その書籍は、私がウィルバーのインテグラル理論を学びにアメリカに留学することを決定的なものにしたというよりも、その決定を促す大切なきっかけになったことは間違いない。ウィルバーの思想の探求、および人間発達に関する本格的な探求を始めるきっかけになったことは確かである。

さらに偶然は続き、今回大阪で一緒に仕事をさせていただいている協働者の方の会社は、まさに自分がアメリカ行きを決意した2009年に設立されたそうであった。昨夜、協働者の代表の方は笑いながら、「もしかしたら2009年にこの辺りですれ違っていたかもしれませんね」と述べていた。それは大いにありうるのではないかと思う。

今回の一時帰国中には、その他にも本当に不思議なことが身に起こっている。幸いにも、それらは幸運と素晴らしい運命の巡り合わせと呼べるようなものであり、そうした現象が自分の身に起こるにつけ、「人生この不可思議なるもの」という思いを強くする。幸運と運命の輪の中にいる。その輪は、自己の周りから同心円状に外に開かれながらにして拡がっている。

代表のその方曰く、「この辺りはパワースポットなんですよ」とのことであり、ジュンク堂の近くに以前は御堂のようなものがあったそうである。そのような御堂があったことを私は知らなかったが、この場所には何か自分にとって大切な力があるように思えてくる。それは新たな縁をもたらす不思議な力であり、人生を新たな方向に導いてくれる不思議な力である。

明日は大阪を出発し、実家の山口県に移動する。特に急いではいないため、明日の朝はぜひともホテルの目の前にあるジュンク堂に足を運んでみよう。そこでまた再び自分の人生を変えてくれる出会いの書があるかもしれない。仮にそうしたものがなかったとしても、10年振りに堂島の地に足を運ぶことができたことは、きっとこれからの自分の人生において何かしらの意味があるのだと思う。ジュンク堂の近くの御堂はすでに移動させられてしまったとのことであるが、その跡地に行き、10年前の啓示的なメッセージと導きをもたらしてくれたお礼を述べたいと思う。人生はここからまた、新たな導きに導かれて進んで行く。大坂：2019/10/4（金）08:09

## 5017.【日本滞在記】風、そして輝き

時刻は午前5時半を迎えた。この時間帯の大阪の街は闇に包まれており、夜明けを待っている。そう、今の自分と全く同じように、この街は夜が明け、新たな一日が始まることを楽しみに待っているのである。

大阪の街も眠り、目覚め、そして呼吸を楽しみながら新たな一日を過ごす。この街と私の差異などあるのだろうか。自己が身を置く空間と自分との間に差異などあるのだろうか。

私は今、大阪という街の中に溶け込んでいる。文字どおり、自己が柔らかく溶解し、この街と一体となっている感覚があるのである。それが目覚めてすぐに感じたことである。

昨夜は、協働者の方々と一緒に梅田駅の近くにあるボルダリングジムに足を運び、ボルダリングを一緒に楽しんだ。この体験についてはまた後ほど改めて日記を書き留めておきたい。

ジムから帰り、ホテルの浴槽を出た頃には日付が変わりそうな時刻になっていた。オランダでは午後10時前に就寝する習慣があり、それは日本に一時帰国してからも変わらなかった。むしろ、日本に一時帰国してからは時差ぼけもあり、9時半頃に就寝することもあった。そうしたことを考えると、昨夜の就寝は遅かったのだが、今朝は午前4:45に目覚め、目覚めの瞬間に自分の心身に気力が満ち満ちていることがわかり、すぐに起きた。本当に飛び起きたい気分だった。

起きてすぐに、今日という新たな一日を祝いたい気分であり、その場で踊りたいような躍動的な感覚が自分の中にあった。また始まったのである。自分の人生の新たな一日が始まったのである。

ある一日が終わり、新たな一日がやってくることは当たり前のことなのだろうか。私はそうは思わない。きっとそれは当たり前なんかではなく、奇跡的なことなのではないだろうか。そうすると、人は皆、毎日奇跡の目撃者なのだ。そうした奇跡に感謝の念を捧げることができるだろうか。そうした奇跡が再度自分に起きること、そしてその他の人にそれが起きることを祈り、願うことができるだろうか。

ゆっくり、ゆっくりと、大阪の街を覆う闇が晴れてきた。夜明けが迫ってきているこの瞬間、大阪の街は一体何を思い、何を感じているのだろうか。そうしたことが気にならないだろうか。私は大いに気になる。今日はいよいよ実家に戻る日だ。およそ2年振りに実家に足を運ぶ。両親と愛犬の顔を見れることの嬉しさは、年々増すばかりである。そこには「嬉しさ」という言葉だけでは表されぬ感情があることを今の自分は知っている。

実家のある山口県光市の駅に降りた時の感覚は、いつもとても穏やかだ。瀬戸内海から駅に向かって吹き通る風。駅から見える瀬戸内海の輝き。風は全ての人に平等に吹き、世界は全ての人に平等に輝きを見せる。大坂:2019/10/5(土)05:40

## 5018.【日本滞在記】心と魂まで降りていく問い

昨夜もまた泣いた。昨夜もまた涙が自ずから溢れてきた。

昨夜は、大阪梅田駅の近くにある立命館大学の大学院が使うキャンパスでセミナーを開催した。そのセミナーの後半、ある参加者の方から頂いた質問に答えている最中に、涙が溢れてきた。質問の内容についてはここに具体的に明記することをしないが、その問いは、自分の心と魂まで降りていくことを促してくれるものだった。別の表現をすれば、その問いは、頭だけで回答することを避けさせる何かが内包されており、問いが心と魂まで降りていき、自己の深層部分から回答することをもたらす余地が多分に含まれたものだった。

頂いた質問に答えている最中に突然溢れてきた涙の正体は、感謝と嘆き、あるいは感謝と義憤からもたらされたものだった。贈り物のような問いがあるのだ。それは目に見えるような何かではないが、言葉としての形を持っており、その形は心と魂で捉えることでき、受け取ることができる。

時刻は午前6時を迎えた。この世界のどこにいても、私は日記と作曲を行っていく。言葉を紡ぎ出し、曲を作っていく。

儚く尊い人生のある一日の中で、自分の内側に姿を見せてくれた言葉と音を形にしたい。それをし続けていきたい。そうした思いで今この日記を書いており、これから曲を作りたい。一曲、あるいは

二曲作ったら、ホテルのチェックアウトに向けて準備を始めよう。そして早めにチェックアウトをして、フロントで荷物を預かってもらい、ホテルの目の前にあるジュンク堂書店大阪本店に繰り出そう。

10年前に運命的な出会いをもたらしてくれたこの場所に、今日再び私は足を運ぶ。今の自分は、新たな運命的な出会いを期待していると言えるだろうか？そうした期待が全くないと言えば、それは嘘になる。だが、私たちの毎日には、新たな運命的な出会いが絶えず満ち溢れていると言えないだろうか？何気ない日常に絶えず存在してくれている運命的な出会いに眼を開こう。

心と魂を開いていこう。そうすれば、運命的な出会いが見えるはずではないだろうか。そうした運命的な出会いが日々の至る所に遍満していることに感謝しよう。ジュンク堂を訪れた後にはぜひ、書店を出てすぐのところにある御堂に感謝の祈りを捧げよう。御堂本体がそこになかったとしても、そこに看板があったことを昨夜確認した。御堂は別の場所に移されていたとしても、その看板に深く祈りを捧げたい気分だ。

梅田上空の空は晴れていて、空も何かに祈っている。私も何かに対して祈っている。大坂：2019/10/5（土）06:20

## 5019.【日本滞在記】嬉しい贈り物

時刻は午前7時を迎えた。辺りはすっかり明るくなり、土曜日の朝の大阪の顔が今目の前に広がっている。今日は土曜日なのだが、ホテルの自室の窓から外を見ると、高速道路には数多くの車が走っている姿が見える。彼らは一体どこに向かっているのだろうか。

今日はこれから一曲ほど曲を作り、ホテルの目の前にあるジュンク堂書店大阪本店の開店と同時に店に入る。すでに購入したいと思っている書籍は決まっている。目星の書籍を全て購入できたら有り難いが、書店に置かれていないものがあったとしてもそれは運命と受け止め、そこで出会えた書籍との出会いを大切にしよう。実家に戻る列車の中ではそれらの書籍を読みたい。

今のところ購入を考えているのは下記の書籍である。

・『わが思索のあと』

・『人生は一本の線』

・『桃紅　105歳　好きなものと生きる』

・『その日の墨』

・『物語の海へ　辻邦生自作を語る』

・『完全版　若き日と文学』

・『地中海幻想の旅から』

・『においと香りの表現辞典』

昨日のセミナーでは、大変嬉しい贈り物をいただいた。先月の月初まで行われていたオンラインゼミナールの参加者のある方が今回のセミナーに参加してくださり、その方から直筆のお手紙をいただいた。それは大変嬉しい贈り物の一つであり、実家に帰ってからまた後ほどゆっくりと拝読させていただきたい。

二つ目の贈り物として、協働者の方の計らいで、セミナーの終了時に花束を贈呈していただいた。しかも今回のセミナーには、前職時代において最も敬愛するある上司の方が参加してくださり、その方から花束を贈呈していただいた。その花束は、今ホテルの自室のソファに飾ってあり、高貴な香りがそこから立ち込めている。その香りを味わいながらふと、この世界には様々な色で溢れているだけではなく、様々な香りで溢れていることに気づいたのである。

ちょうどそのテーマについては、昨日協働者の方とも雑談をしており、音には色のみならず、香りがあるということに気づくきっかけになった。現在私は、配色辞典あるいは色彩辞典を手元に置きながら作曲実践をしているのだが、本日ジュンク堂でぜひ上記に掲げた香り辞典を入手できればと思う。

この世界は多彩な色で満ち溢れており、多種多様な豊かな香りで満ちている。そうした色や香りを味わいながら日々を過ごしていきたい。

最後にもう一つ嬉しい贈り物として、これまたオンラインゼミナールの別の参加者の方から、シルクの腹巻をいただいた。その方は、協働者の皆さんと私のために栗きんとんも贈ってくださった。ただ

私が食に細心の注意を払っていることから、食べ物以外のものとしてその腹巻を贈ってくださったのである。この贈り物は大変嬉しいものであった。

オランダはこれからめっきり寒くなり、おそらく再来週にオランダに戻る頃からは、もう湯たんぽが必要になるかもしれないと覚悟している。夜寝る際に湯たんぽを使い、朝晩そして日中においては、ぜひいただいたシルクの腹巻を活用したい。とはいえ、腹巻を着用するのは初めてのことなので、いただいた品の封を切り、中身を取り出してみたところ、どのように着用するのかわからなかった。それは巻くタイプではなく、それを上から被ったらいいのか、それとも下から履いた方がいいのか迷ってしまった。腹巻が伸びてしまうことを防ぐためには、下から履いた方がいいのではないかと今のところ結論づけている。

先ほど、せっかくなので腹巻について色々と調べていた。腹巻はお腹のみならず、腰も温めてくれる効果があり、腰痛の改善にもつながるそうだ。私は腰痛持ちではないが、いくらバラスボールに毎日座り続けているとはいえ、腹巻を巻くことによって、腰を温めながら腰を良い状態に保つことができるのではないかと思う。

調べながら気づいたのは、妊婦のための腹巻の情報がたくさん溢れていることであり、どうやら腹巻は妊活や妊婦さんにとって良い効果を持っているようだ。私には妊婦はおらず、自分も妊婦たりえないが、病の大部分は胃腸からと言われるように、胃腸を温め、活性化させるために、いただいた腹巻を大切にしながらぜひともこれから愛用したいと思う。

取り扱いの注意書きを読むと、手洗いでの洗濯を勧めており、洗濯機で洗う場合はネットを使った方がいいとのことである。また、絹は熱に弱いため、水温は40度以下にし、乾燥機を避けた方がいいとのことであった。この点には注意し、いただいた品を長く愛用していきたい。大坂:2019/10/5(土)07:36

## 5020.【日本滞在記】実家での贅沢なひと時を味わいながら

波の音。瀬戸内海の波の音が、自分の内側に静かに染み渡っている。今私は、実家のバルコニーにいて、目の前に広がる穏やかな瀬戸内海を眺めながらこの日記を書いている。父が私のために、バルコニーにスタンディングデスクを設置してくれ、新鮮な空気を吸いながら瀬戸内海を眺めること

ができ、さらには鳥たちの声を聞きながら、日記の執筆や作曲を行うことができている。なんとも贅沢な時間を過ごさせてもらっている。正直なところ、今自分の内側から言葉がなかなか出てこない。それほどまでに申し分のない環境の中に自分はいて、今という瞬間を過ごしている。

父からは書見台も借りたので、スタンディングデスクの上に書見台を立てかけ、そこで読書をしたり、楽譜を立てかけて作曲実践を行うこともできる。実家はまさに最良の創作空間となった。

以前実家に訪れたのは2年ほど前のことであり、そこからこの2年間で実家の様子も随分と変わった。それはとても肯定的な意味での変化であり、あまりにも変化の量が多すぎて、昨日実家に到着した時には相当に驚いた。今もまだその変化を咀嚼中である。今は無理に言葉を生み出すのではなく、徐々に自分の言葉を内側から生み出していきたいと思う。

両親も食生活を大きく変え、オランダで私が行っている食生活と非常に似たものになっていることをとても嬉しく思う。いや、二人の食に対する意識は私以上であり、昨日共にした夕食の際にそれを感じた。今回実家に滞在するのは10日間ほどだが、その期間において食に関して何の心配もないことを有り難く思う。

今日も普段通りに午前4時半頃に目覚めた。この10日間は、本当にゆっくり過ごそうと思う。基本的にはバルコニーにいて、瀬戸内海の波の音や鳥たちの鳴き声を聞いたり、母が練習するピアノの音を聞いたり、父の部屋から流れてくる心地良い音楽に耳を傾けながら、私は日記の執筆と作曲、そして読書に取り組んでいこうと思う。この10日間は、本当に贅沢なひと時になるだろう。山口県光市:2019/10/6(日)08:29